勇気の湧くところ

「偉大なギリシャはどこへ行ってしまったのか。いまのギリシャ人は、その日の自分のことばかりで未来や他人のことを考えない。」 こうした慨嘆が世界に広がっているようです。けれどもギリシャに限らず、世界の各国が大なり小なりこうした傾向になっているのではないでしょうか。

日本においても、この数十年間、物質生活の向上、消費、レジャーの増大が国民の幸福度の唯一の指針となった感があります。それはもっぱら目先の満足の追求でした。功利主義思想の蔓延、市場原理のあらゆる社会システムの侵犯、称賛されるのは競争に打ち勝つ強い個人。その帰結が、金儲け至上主義、自己中心、そして無縁社会です。

3.11 でわれわれはそうした生き方に根本転換を迫られるに到りました。「絆」という言葉が復活し、内外の共感を呼んでいます。そもそも現世人類が生き残ったのは、助け合いの仕組みを持つたからだといわれています。そして助け合いこそが古代都市文明以来人類の根本規範であったことは、仏教、儒教、ギリシャ哲学、キリスト教をはじめとする普遍的思想に照らしても明らかなことです。

日本では聖徳太子が大乗仏教の空の観念を導入しました。空とは一言でいえば縁起の思想です。自我その他すべての事象は、独立に存在するのではなく、様々な原因、条件によって、つまり他に依存して成り立っているという思想です。縁があるとは、結びつき、関係があるということ。縁はできるだけ拡げた方がよいようです。「論語とソロバン」の説話は、経済活動に関して縁を広く、長く捉えていて、高い合理性をもつていると考えられます。また、自然と向き合えば、多様な生命の貴重さを意識せずにはいられないものでしょう。

さらに人間は宇宙など遠大なものへの憧憬をもつ存在でもあるようです。カントは「天空に輝く星々」と「人間の内なる道徳律」をともに崇高なものと呼びました。最近落語家の桂三枝師匠が日経の私の履歴書に次のように書いています。大学を卒業しながら落語界へ入ったことについて、その決断の背中を押してくれたのは、小学校の担任の先生からかつて聴かされていた言葉――「宇宙の大きさに比べて人間の人生のなんと小さなものか」――であったと。現代は教育の場においても往々にして、すぐ役に立つことを取り上げる傾向があります。しかし師匠の先生は子供たちに夢を語っていた。それがいざという時、物を言ったのです。

大いなる存在に気づいたとき、人は当面の欲望に拘泥することなく、より自由となり、最善をつくす勇気も湧くということであります。

当センターは、多くの方々に支えられて存立できていることを改めて痛感します。このみなさんとの御縁に深くお礼申し上げるとともに、今後さらに各方面に縁起を拡げ、正しい視野をもてるよう心掛けたいと存じております。

（2012.5.23 （社）くらしのリサーチセンター総会パーティ挨拶）